

明治政府と伝統芸術

横溝 廣子 YOKOMIZO Hiroko

東京芸術大学大学美術館

日本が二百年ぶりに世界へ公式に扉を開いたとき、政府が日本をプロデュースするためにさまざまな方策をとった。まず行ったことは西洋人の忠告にしたがって長い歴史の中で育まれた伝統芸術（技術）を世界の表舞台に送り込むということで、ちょうど同じ時期に流行した万国博覧会および輸出向けの工芸品の制作者に図案を貸与し、あるいは図案のアドバイスを行い、これらの一部が現在作品として確認できる。このシステムは政府の組織下で日本史上著名な美術品に用いられた古代からの文様や絵画を現代の工芸・装飾に応用するという基本を重んじる事務官たちによって実行され、数多くの作品が輸出された。今更いうまでもなく、これらが「ジャポニズム」や「アール・ヌーボー」と呼ばれる一時的な流行を影響し、マルコ・ポーロが「黄金の島ジパング」と伝えた国の存在を表すエグゼクティブなイメージを好む客の購買意欲をくすぐり、日本人にとって自国の文化に自信をもたせる役割を果たした。

また、国のイメージをプロデュースするその時代のもっとも重要な建物と位置づけられる俗称「明治宮殿」（1888年竣工、1945年焼失）の室内装飾などを工芸品の図案指導を行った同じ政府の博覧会事務局（博物局）の関係者が担当し、ここでも紆余曲折を経て伝統的な日本のモチーフが室内の天井や壁面装飾に採用された。ここは外国人を含めた国内外の要職の人々が天皇に謁見する日本を代表する空間であり、その装飾に用いられた文様の中には輸出用の工芸図案と同類のものも用いられている。一致して同じ理念のもとに日本古来の美術を深く意識し、その意匠にこだわりつづけた状況が明確に示されるといえよう。

本稿では、筆者がほぼ15年から携わった東京国立博物館における明治時代の博覧会事務局の関連資料を調査した結果をまとめた東京国立博物館編「明治デザインの誕生—調査研究報告書『温知図録』」（平成9年3月）、同館の紀要第34号「明治政府による工芸図案の指導について—『温知図録』関係資料に見る製品画図掛の活動とその周辺」および1945年の戦火で焼失した明治宮殿の天井画について述べた『柴田是真下絵・写生集—東京芸術大学大学美術館所蔵』（平成17年春に東方出版より刊行）に示した最近の研究成果を概略し、明治政府にとっての「伝統」と国家イメージを考えさせる題材になれば幸いである。

工芸図案の配布制度および製品画図掛の概要

日本の伝統工芸品の万国博覧会への出品および輸出を奨励した明治政府はそのために全国の工芸家に対して、博覧会に出品する工芸品のデザインを図案で示すという指導政策をとった。明治8年から18年までこうした指導が行われ、各工芸制作者に送った図案の写

しが84帖の折本に編纂され、『温知図録』（一部は未編纂の『温知図録原稿』九巻に収録）と題して東京国立博物館資料部に残されている。前述の報告書には、図案約4000枚のデジタル画像、図案をもとに製作された実作品の情報や、依頼した工芸家と図案制作に従事した画家などの人名注解も載せており、明治政府による工芸図案指導を理解する上で不可欠な情報である。

これらの工芸品の図案を制作したのが博覧会事務局および製品画図掛（内務省、大蔵省および農商務省へと管轄が変遷した部署）である。博覧会事務局における図案指導については詳細がわかる資料が限られるが、製品画図掛についてきわめて具体的な制度の内容が判明し、報告書の解題にて提示した。それは各制作者が製品画図掛に願書によって図案を依頼し、製品画図掛が描いた図案を依頼者に貸与するという方法による指導であり、あるいは工芸家が図案を提出し、製品画図掛がそれを修整することもあった。制作者が目的や形態を指定して図案貸与を依頼した願書類、図案のモチーフ等を明記した図案送付の帳簿、主に『温知図録原稿』の図案の依頼記録や、製品画図掛が参考図書とし、図案の典拠が判明する書籍目録が『温知図録』と切り離せない資料群として前述の紀要に可能な限りこれらの情報を掲載した。

『温知図録』第一輯の山高信離の前文によると、明治9年のフィラデルフィア万国博覧会事務局は出品する作品の下図を作成して全国の工芸家に配布し、あるいは工芸家の請求に応じて各自が作成した図案を修整した。作成および修整は事務官（塩田真、納富介次郎、岸光景、中島仰山）と画工（岸雪浦（圃）、狩野雅信）が従事し、陶器、七宝、鋳物、鍛鍛器、籐細工、刺繍、紋、氈、染、革、合せて十種類に分けて縮写した。これらの図を作成する時、古画から形や文様を探し、新しい意匠を加えて描いたので「温知図録」と名づけたという。

このフィラデルフィア万国博覧会にはじまり、明治10年内国勸業博覧会（第一回）と明治11年パリ万国博覧会についても、同じく各々の博覧会事務局が同様の図案指導を行った。多数の依頼を処理するため、明治14年第二回内国勸業博覧会については製品画図掛という部署を設置し、この業務を引継ぎ、博覧会出品に限らず輸出向けの工芸品の図案も制作した。明治16年までの図案のほとんどを清書して『温知図録』84巻に編纂し、さらに継続して『温知図録原稿』と題した明治18年まで作成した下書き的な図案を収録した巻物としてまとめた（資料1参照）。「製品画図掛」とは明治9年5月に内務省勸商局に設置された掛で、その職制は「海外需用品ノ流行ヲ案シ之カ製品画図ヲ製シ諸工芸者ヲ補助誘導スル等ノ事ヲ担当ス」とされた。明治11年には大蔵省商務局が設置され、製品画図掛が移管されるが、明治14年4月には商務局が廃止され、製品画図掛は同年設置の農商務省博物局芸術課に移管される。掛の業務の具体的な内容は「製品画図掛并供議人心得方」（明治14年4月20日）に示される；

「要領 本邦固有ノ諸製品ハ勿論其佗各種ノ製作品ヲシテ広く海外ノ流行ヲ按シ各工ノ所長ヲ考エ其難易ヲ識別シ製品画図ヲ製シ諸芸術ノ進歩ヲ補クルヲ責任トス」
そして十カ条にわたる詳細な取り決めが次のように続く；

第一条 本掛ニ於テハ専ラ諸工ノ知識ヲ拓メ見識ヲ高ラシメ以テ其芸術ヲ上達セシ

ムルヲ要ス

第二条 固有ノ工事ニシテ其類廢シタルハ振興シ古人ノ妙技ヲ温ネテ其遺法遺術ヲ諸工專ラ我美術ヲ保存シ益精妙ナラシムルヲ要ス

第三条 内地各所又ハ各工芸家ノ所長ヲ熟慮シ夫々相当スル製品ノ種類ヲ審按シ以テ其絵図ヲ製スヘキ事

第四条 其製品ハ專ラ輸出先ノ需要ニ適スヘキヲ勉ムヘシ依テ各国流行ノ沿革ヲ審按シ之ガ一歩先行ヲ為サン（コト）ヲ考エ其品類及ヒ格好模様ヲ熟考スルヲ基拠トスヘキ事

（以下省略）

このように、製品画図掛はわが国固有の美術を保存し、各地各工芸家の特徴を踏まえながら輸出向けの図案を製作する、あるいは校正し、請求者に貸与（下付）するという内容であった。これは、わが国固有の美術の保護と輸出拡大に力を入れた竜池会の活動に類似する主旨であるが、同じ頃（明治11年）に活動を開始した竜池会のメンバーを見ると、河瀬秀治、山高信離、塩田真、山本五郎、納富介次郎、岸光景、松尾儀助、若井兼三郎などであり、ほとんどが製品画図掛またはこの博覧会事務局においてこの図案作成に携わっていたメンバーと一致している。製品画図掛の部局長としてともに内務省勸商局長から大蔵省商務局長へ移った河瀬秀治は後にこの工芸図案指導について「当時私は、商務局長を勤めて居って、局の中に図案係りを置いて、総ての工芸品の図案を拵へました。勿論予算も許しませぬから、極小さな定額金の中で、納富介二郎、岸光景、山高信離、塩田真などの人が居って、日本的な花瓶の雛形を拵え、又蒔絵の下図を書かせたりして居りました。（途中省略）斯る状態で政府の方針としてはとても成立つべき見込みもなく、僅かに事務局にて命脈を維持せんとする位の事ではならぬと考へ、夫々有志者に図って龍池会を民間的に組織し、伯爵佐野常民を会長に戴き、上野不忍池弁天の社内毎月美術品の評論会を遣つて居りました」という談話を残しており、この中で河瀬は製品画図掛の業務が龍池会の活動に引き継がれたように語っている。

明治18年には各省の機構が簡素化され、製品画図掛は農商務省博物局の天産・農業・工芸・芸術・史伝・図書・兵器・教育・庶務の八課のうちの芸術課（工芸課ではなかった）に置かれていたが、河瀬の言葉のとおり成立する見込みもなく、明治18年12月27日をもって廃止された。

製品画図掛による図案のモチーフについて

『温知図録』のうち43帖分（第35～77巻）の図案について、図案の製作者自身が意図したモチーフが明治11年～15年の図案の帳簿に記載されており、「菊」が最も多い。続いて梅、古代紋様または古紋様、蓮、鳥、鳳、龍、唐草、牡丹、藤、雲、松、雷紋、雀、桃、花鳥、蝶、竹、鯉、鶴などと続く。単独のモチーフ以外にこれらを組み合わせたものとして「名花十友」、「四君子」、「玉堂富貴」、「三清」、「四愛」、「五霊」などの言葉も見られ、中国の吉祥紋様を収録した図譜がかなり参考にされていたのである。製品画図掛の

明治11年1月時点の保管本のリストに記載されている資料の大部分が東京国立博物館に残っており、これらの図案のもととなった原資料が一部判明し、参考図をそのままの構図で用いた例や、部分的にアレンジした例などがある(図1, 2)。つまり「温故知新」にちなんだ『温知図録』の図案がたずねた古画とは主に江戸時代および中国清時代に出版された図譜類に描かれたものであった。

このように製品画図掛の心得に「本邦固有」を前面にうたっているにも関わらず、数多く中国の画題や古銅器を手本にしていたことから、彼らの「本邦」とはアジア圏全体を含んでいた、もしくは中国模様イコール日本模様とも受け取られる。しかし明治初期の美術については、「国粹主義」の龍池会、ワグネルやフェノロサなどをはじめ、当時の美術指導者が中国美術からも区別した日本独特の美術工芸を志向したとされ、諸外国に対して鎖国のヴェールを脱いでまもない日本のアイデンティティを明確に示すためにも、中国との類似を避けなければならなかったはずである。しかし製品画図掛の図案においては、そうした主義は当てはまらず、中国の手本を写し取ることや既成の美術から図案を流用することが行われたのであった。

製品画図掛に関わった人々による図案研究

製品画図掛がこれほど膨大な図案を次々と産出できたのは、このような図の転用をベースにして描いていたからということもあるが、この図案配布制度という業務をこなす一方、製品画図掛に関わっていたメンバーたちは図案研究をも熱心に行っていたことが山高信離編輯『秋琴堂鑑賞餘興』(明治14年発行)という図案集によってわかる。この本の山本五



図1 左図『宣和博古図録』 右図『温知図録 第三輯』31-8



図2 左図「蜀紅錦」高島千春編『求古図譜』 右図『温知図録 第四輯』52-6

郎による序（明治13年2月付）や、続く山高による文章には品題に応じて各自が描いた図案の品評を行い勝ち負けを競った成果を編集したと記載されている。内容は「蒔絵香合之部」「鋳物燭台之部」「陶茶器之部」の三つの課題について、製品画図掛に関わっている人々の図案を収録している。この図案集は、日本最初的美術団体と位置づけられる龍池会の創設もない時期に行われた工芸図案品評会の図案を掲載したものであると思われる。龍池会は、「本会創立後数会ノ間ハ宿題ヲ設ケ会員諸君ヨリ図案ヲ出シ其優劣ヲ定ムル例ナリシガ是ハ工芸家ノ技倆ヲ練磨シ美術品製造家ノ裨益少ナカラズ然ルニ会務ノ変更等ニテ暫ク中絶シタルハ甚ダ惜ムベキ事ナリトノ論モアリ如何ニモ此儀ハ美術奨励上ニモ有用ノ事業ト思惟セラルルニオリ再興シテ後会ヨリ実施センコトヲ企望ス」とあることから、明治12年3月に正式に創設された後、数回は図案品評会を行っていたが一時中断した、といえよう。製品画図掛が廃止された後に再開させた明治20年3月以後の図案品評会については『龍池会報告』に記載される「図按出品手続」や毎号のように掲載されている「図案宿題」や「考按図并投票点数表」によっておおよそわかる。

この図案配布制度に関わった人々は、それが廃止されても明治時代末期まで博覧会で工芸品を審査する立場や、次に述べる宮殿などの建物の室内装飾にあたるなど、明治のデザインに影響を与え続けたのである。

明治宮殿千種之間天井画

「明治宮殿」は、それまで明治2年より皇居として用いられた旧江戸城西の丸御殿が明治6年5月5日に焼失したのを受けて、その再建のために明治17年に起工し、明治21年

に竣工した皇居であり、昭和20(1945)年5月に戦火によって焼失した現在の皇居の前の建築である。この宮殿の中の千種之間(造営当初は後席の間)と呼ばれる饗宴の後の休憩に使われた広間の格天井には柴田是真・真哉親子の下絵による金地の花丸文の綴錦がはめ込まれており、その美しい迫力については当時から現代まで数多くの文献で絶賛されている。位置としては西の丸・山里地域で、現在の皇居における宮殿は明治宮殿の跡地とされている。宮内庁工務課保管の明治宮殿の図面を参照すると、「豊明殿」(造営時は「饗宴所」と「千種之間」(造営時は「後席之間」)は隣接し、「後席之間」は「後席」の名が示すように饗宴後の休憩所という性格をもち、「千種之間」「牡丹之間」「竹之間」はいずれも室内の装飾にちなんだ名称である。宮殿の主要な室内写真に見られる天井の多くは格子状の中にはほぼ同一の極彩色の花紋(部屋毎に異なる)が各格子内に配され、格式高く厳格かつ強烈な印象を与える。『明治工業史』には宮殿の天井について詳細に記載されており、基本的には格天井は紙にさまざまな古代の花紋が施され、それが山高信離の指揮下で行われたとしている。そして、正殿、豊明殿、千種之間以下の各間の天井画模様が記され、東大寺宝物の文様をはじめ、ほとんどが古模様を参照しているという。また、写真帖に見られる天井格子内が無文の板のままの天井(御車寄、受付之間、鳳凰之間など)は落ち着きのある静粛な雰囲気をかもし出し、使用の場所に応じた配慮が感じられる。

『明治工業史』によれば正殿の「折上格天井二重平」は「東大寺經函絵紋」の宝相花模様からとり、正倉院中倉の「密陀彩繪箱」(13号)の文様と酷似する。豊明殿の天井画は「折上格天井二重平」は「政子手函浮線綾紋」からとっており、国宝「浮線綾螺鈿蒔絵手箱」(サントリー美術館蔵)の文様と一致する。周辺の模様も厳島神社の平家納経など各種古模様を参考にしている。千種之間の折上格天井には格子ごとに異なる千草模様の金地織綴錦が貼られた。宮殿写真に見られる他の格天井の紋様と比べて千種之間の天井は同じ格子状であっても、各々の格子にはすべて異なる優雅な丸い草花図が表現されており、同じ図を繰り返すよりもはるかに多くの労力を必要とする。休憩という目的を踏まえて、厳かさよりはほっとできる、和やかな空間を心がけた計らいといえよう。

千種之間の天井の図案制作は柴田是真の次男である柴田真哉(本名 慎次郎、明治19年-27年の間は池田泰真の養子として池田姓を、それ以前に一時は真瀬木姓を名乗る)が天井画の制作を皇居造営局事務局の山高信離より拝命した、とされている。真哉が描いた下図は織元にすぐに送付されたので現存せず、真哉を助ける意味で一種の手控えとして同様な図柄のものを是真が描き残した、という遺族の伝聞による図案112枚が東京芸術大学に収蔵されている。下絵が東京芸大の所蔵品になるまで、明治宮殿について記述した出版物に真哉がこの天井画下絵を制作したと記載する資料は見当たらないが、千種之間が竣工した直後の明治20年12月10日の『東京日々新聞』に「皇居御造営につき御表謁見所の御格天上は悉く金糸綴れ織にて花の丸を織込む事となり其下画は柴田是真翁へ命ぜられ織方は京都高等女学校綴織科へ命ぜられ生徒八名にて本年五月頃より織立に着手し昨今落成を告る事となりしば此八名の生徒は五月以来一日の休みもなく早出居残りにて勉強し出来栄も殊に美事なれば北垣知事より特別の賞与あるべき由なり」と柴田是真が天井画の下

絵を命じられたと報道された。実際の千種之間の天井写真と比較して、少なくとも現存する是真の図と織元に送られた真哉の図は構図的にはきわめて近いものであったことは確認できる。

柴田真哉の日記によれば、明治20年4月8日に皇居御造営事務局より郵便封書で呼び出され、翌日に事務官の山高信離に会い、後席広間の天井格間の綴織のための花の丸下絵112枚の制作を拝命し、詳細に図案作成日を記録した。7月5日にシャンデリアの座の2ヶ所を含む12枚を最後に約2ヶ月かけて計112枚を納めた、7月13日に造営事務局より郵便で呼び出され、翌日に事務局に出頭し、花の丸御下絵料として金二百円下賜の証書を受け取り、大蔵省金庫局で引換に現金を受領した。待つこと3ヶ月、12月24日に皇居が落成したので真哉の身内六人で参局、荒木寛敏、川端玉章、大庭学仙など、奥宮殿の杉戸絵を担当した画家とともに宮殿内各室を4時間かけて見学したという。

この日記の記述から読み取る限り、1号から112号の配置と寸法が指定された「花の丸」112枚の図を依頼され、直径1メートル以上の図を平均1日に2図以上のペースで仕上げ、その後は綴織になった天井の完成品を見るまではそれ以上関与しなかった、と見られる。どの位置に何の草花を描くかという指定まであったかどうかは不明であるが、下図付属の展開図の番号と日記の番号は一致する。前述の東京日々新聞の「織方は京都高等女学校綴織科」の「京都高等女学校」とは、明治15年に設立された京都府女学校が明治20年に高等女学校と改称され、課程の手芸専修科の中に「綴織」という教科があった（京都市学校歴史博物館の福井純子氏による）ことから、5月3日に納入したものがすぐにこの学校に送られたとみられ、12月10日頃まで8名の生徒が休なく朝から晩まで励むほどぎりぎりのスケジュールで織り上げたものが格天井に取り付けられたことになり、日時的には矛盾しない。

Handwritten labels on the right side of the grid:

- イ之部 中央米線部
- ロ之部 上下左右監線部
- 二之部 上下左右監線部
- ニ之部 上下左右監線部

図3 柴田是真筆 千種之間天井画展開図 (東京芸術大学大学美術館蔵)

ここで、下絵付属の展開図（図3）に見られる配置と、宮内庁工務課所蔵の明治宮殿写真帖に見る千種之間の写真を比較したい。この千種之間の天井が両方向から撮影されているおかげで、千種之間の実際の折上格天井の図の配置をわかるかぎり示す（残念ながらシャンデリアや影などで配置の全貌はわからない）と図4のように見える。展開図の配置と比較すると、豊明殿から廊下をわたった入口にきわめて近い位置で、和やかというより燦々と明るい印象が強く、江戸時代に渡来したとされる向日葵図である18号（図5）の位置が周辺の際のどこかに移され、平安時代の文献にも見られる蕨である24号（図6）がその位置に移動された。その他にも各図の配置や向きがさまざまに変更されており、このこ



図4 明治宮殿千種之間写真による天井画配置図（空白は不明部分）



図5 柴田是真筆 千種之間天井画第18号「向日葵」

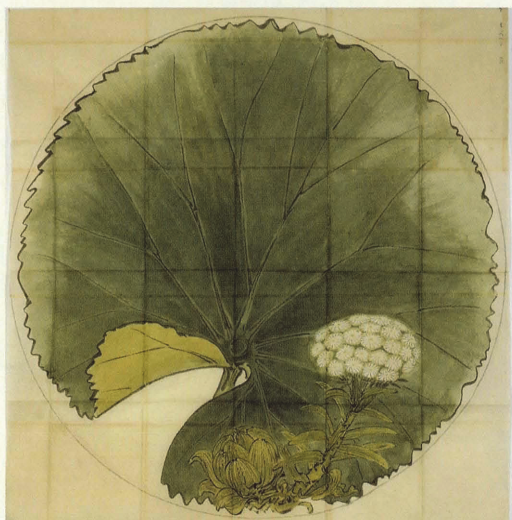


図6 柴田是真筆 千種之間天井画第24号「藪」

とから、図案を描いた画家以外に図案を操作した人がいたと見なすことができる。

依頼主の山高信離は皇居造営の内装の総責任者であった。『明治工業史』でも、「総て絵画若しくは彩色等に係る事は博物館長山高信離専ら之を指揮せり」、以外に「裝飾意匠に就いては山高信離主として之に任し、掛員を率いて意匠慘憺たりき。天井欄間等の意匠の如きは全く山高其の他掛員の苦心の結晶なりといふべし」、つまり天井画の意匠は山高および無記名の部下たちの業績であると力説している。同じ明治宮殿の奥宮殿杉戸絵の描くために明治18年に全国から当時の各流派を代表する画家を選考したのも山高であった。この杉戸絵については、関千代氏の見解によれば、御殿に応じてふさわしい画題が出されていたと見られ、天井画でも広間の用途に応じた配慮があったことは前述のとおりである。この山高信離が博物局員として『温知図録』の編纂を指揮し、博覧御用掛、帝室技芸員選抜委員、東京国立博物館長・京都国立博物館長・奈良国立博物館長などを歴任した美術行政の官僚として活躍した。「図案」という分野においては明治14年第2回内国勸業博覧会で「室内什具図案」を出品し、「旧商務局出品考案者 山高信離」の名で褒状を受けており、これが『大蔵省商務局製品画図掛員考案図式』に「考案 山高信離 製図 平山英三」として描かれている手描の図に該当すると思われるが、出品目録と受賞目録には図を制作した平山英三の名は出てこない。さらに、前述の『秋琴堂鑑賞餘興』を編者だけでなく図案の制作者として名を連ねて（山高信離による蒔絵香合の図案〔図7〕は、後に唯一の図案の帝室技芸員に任命される岸光景の図案と並んで掲載され、『求古図譜』掲載の「蜀紅錦 高台寺什物 大政所御守袋」つまり豊臣秀吉の正室のお守袋、および古鏡の紋様を応用したものである。図2左）、前文に彼の図案に対する情熱を記している。つまり、かな

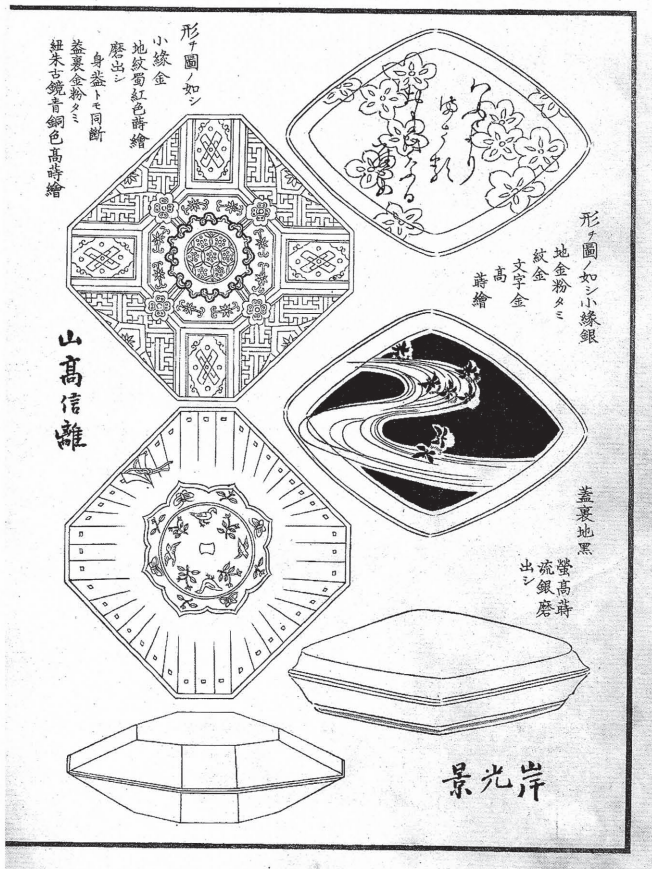


図7 山高信離編輯『秋琴堂鑑賞餘興』（明治14年発行）

り図案家として自信があったといえよう。明治宮殿各広間の天井画の大部分が『明治工業史』で示されるように古美術品の図案を参考にしたという方針は、製品画図掛の図案の基本や『秋琴堂鑑賞餘興』の図案にも共通するものである。このような図案研究指導に携わった山高が、製品画図掛を管轄した同じ農商務省から明治18年6月に皇居御造営事務局への辞令を受け、宮殿という国家事業における装飾にそれまで培った図案研究による見識をもって実際の図案の内容にまで踏み込んだ指示を行ったと容易に想像でき、完成された千種間の天井画の綴錦の図の配置に関与したと考えることができる。

以上、明治政府の官僚たちが当時の工芸・デザイン政策に関わった2つの好例を示した。どちらも政府が国家のイメージを発信する過程で打ち出された時代を考える上での重要なプロジェクトであり、古美術の伝統文様を根幹に据えたものであったことが示されたといえよう。

資料1『温知図録』および『温知図録原稿』内訳

温知図録 壹輯貳拾四帖 米国博覧会事務局 [] 内は東京国立博物館請求記号

- ◇陶器 一～八 (8冊) [和 3581/1～8]
- ◇七宝 九～十一 (3冊) [和 3581/9～11]
- ◇鑄物 十二～十三 (2冊) [和 3581/12・13]
- ◇打延銅 十四～十五 (2冊) [和 3581/14～15]
- ◇漆器 十六～十八 (3冊) [和 3581/16～18]
- ◇木彫 十九 (1冊) [和 3581/19]
- ◇陶器 二十～二十一 (2冊) [和 3581/20・21]
- ◇銅器・漆器・藤細工・縫箔・タンツ一織 二十二 (1冊) [和 3581/22]
- ◇革類 二十三 (1冊) [和 3581/23]
- ◇補欠 (1冊) [和 3581/24]

温知図録 第二輯

- ◇内国勸業博覧会出品 金銀銅鉄七宝器之部 七 (1冊) [和 3581/25]
- ◇内国勸業博覧会出品 彫刻・雜製器之部 八 (1冊) [和 3581/26]

温知図録 第三輯

- ◇? 壹 (1冊) [和 3581/27]
(蒔絵、描金、沈金などの漆器)
- ◇佛国博覧会出品 陶磁器之部 二 (1冊) [和 3581/28]
- ◇佛国博覧会出品 金属器之部 三 (1冊) [和 3581/29]
- ◇佛国博覧会出品 金属器之部 四 (1冊) [和 3581/30]
- ◇佛□□覧会出品 □宝器 □瑯器之部 五 (1冊) [和 3581/31]
- ◇佛国博覧会出品 □□器雜□之部 □ (1冊) [和 3581/32]
(描金、黒漆、牙彫、彫刻(黄揚)、竹など)

温知図録 第四輯

- ◇内国勸業博覧会 描金部、髹漆部 七 (1冊) [和 3581/33]
- ◇内国勸業博覧会 金属部 八 (1冊) [和 3581/34]
- ◇陶磁器部 一～十六 (16冊) [和 3581/35～50]
- ◇七宝器部 一～三 (3冊) [和 3581/51～53]
- ◇金属部 一～十 (10冊) [和 3581/54～63]
- ◇染織 □ (1冊) [和 3581/64]
- ◇描金部 一～六 (6冊) [和 3581/65～70]
- ◇髹漆 一 (1冊) [和 3581/71]
- ◇彫刻部 一～五 (5冊) [和 3581/72～76]

- ◇雑 五 (1冊) [和 3581/77]
- ◇雑 六 (1冊) [和 3581/78]

温知図録 第二輯第三輯残品

- ◇陶磁器部 一～三 (3冊) [和 3581/79～81]
- ◇雑 二 (1冊) [和 3581/82]
- ◇雑 四 (1冊) [和 3581/83]
- ◇雑 十 (1冊) [和 3581/84]

計 84 冊

温知図録原稿

- ◇「金属」 4巻 [和 4050/1～4]
- ◇「七宝・陶磁器」 1巻 [和 4050/7]
- ◇「漆器」 1巻 [和 4050/5]
- ◇「陶磁器」 1巻 [和 4050/8]
- ◇「七宝」 1巻 [和 4050/6]
- ◇「陶磁器・指物」 1巻 [和 4050/9]

合計 9 巻

宮城表宮殿の装飾 (『明治工業史 建築編』より 昭和 2 年、日本工学会・啓明会)

正殿 (造営中は「謁見所」)

- | | | | | |
|------------|-----|---------|----|-----------|
| 折上格天井二重蛇腹 | 極彩色 | 慶雲宝花模様 | 意匠 | 東大寺綾地錦紋 |
| 折上格天井初重長之間 | 極彩色 | 菱形宝相花模様 | | |
| 折上格天井二重平 | 極彩色 | 菱形宝相花模様 | 意匠 | 東大寺経函絵紋 |
| 折上格天井初重蛇腹 | 極彩色 | 古紋蜀葵模様 | 意匠 | 東大寺琵琶落帯革紋 |
| 折上格天井二重長之間 | 極彩色 | 宝相花模様 | | |
| 折上格天井二重平 | 極彩色 | 宝相花模様 | 意匠 | 東大寺経函絵紋 |
| 入側折天井平 | 極彩色 | 七曜葵花模様 | 意匠 | 東大寺経函絵紋 |
- 絵工 小池有終／彫刻 石川光明／髹工 斉藤政吉 市島浅次郎 西村庄藏
浅野善兵衛 堰澤庄吉／織物 川崎甚兵衛 曾和嘉兵衛 杉田幸五郎 小林綾造
飯田新七 内貴甚三郎 青木熊太郎

豊明殿 (造営中は「饗宴之間」)

- | | | | | |
|------------|-----|---------|----|-----------|
| 入側格天井平 | 極彩色 | 斬錦紋模様 | 意匠 | 古織紋 |
| 折上格天井初重蛇腹 | 極彩色 | 春日鉄仙模様 | 意匠 | 手向山神社鐙紋 |
| 折上格天井初重蛇腹 | 極彩色 | 花イチゴ模様 | 意匠 | 古織物紋 |
| 格天井初重平 | 極彩色 | 蜀葵模様 | 意匠 | 蜀紅紋 |
| 折上格天井二重蛇腹 | 極彩色 | 巖島鉄仙模様 | 意匠 | 巖島神社蔵経紙絵紋 |
| 折上格天井二重長之間 | 極彩色 | 古紋一窠菱模様 | 意匠 | 巖島神社蔵経紙絵紋 |
| 折上格天井二重長之間 | 極彩色 | 古紋菱形模様 | 意匠 | 巖島神社蔵経紙絵紋 |
| 折上格天井二重長之間 | 極彩色 | 舞鳳模様 | | |

折上格天井二重平 極彩色 古紋古牡丹模様 意匠 政子手函浮線綾紋
 絵工 小池有終／彫刻 旭玉山 森下兵三／織物 小林綾造 曾和嘉兵衛 内貴甚三郎
 飯田新七 青末熊太郎 杉田幸五郎／髹工 市島浅次郎 向島幸助 浅野善兵衛 斉藤政
 吉 三宅利右衛門 越野半平 西村庄蔵 堰澤庄吉

千種之間牡丹之間竹之間 (造営中は「後席之間」)

千種ノ間入側格天井平 極彩色 古紋八重蜀葵模様 意匠 東大寺蔵器物紋
 竹ノ間折上格天井蛇腹 極彩色 垣ニ鉄仙模様 意匠 稲田豊章下絵 別ニ出所ナシ
 竹ノ間折上格天井平 極彩色 牡丹模様 意匠 稲田豊章下絵 有栖川宮御苑
 生花見合ハセ着色ス
 牡丹ノ間折上格天井蛇腹 極彩色 古紋二色葵模様 意匠 東大寺基盤紋
 牡丹ノ間折上格天井平 極彩色 花雀模様 意匠 東大寺古織紋
 絵工 久保田桃水／彫刻 柴田卯之助 石川光明 木下利吉／織物 東京製織会社、西村
 総左衛門、小林綾造、杉田幸五郎／髹工 堰澤庄吉 柴田卯之助 向島幸助 植村弥吉
 越野半平 斉藤政吉 三宅利右衛門

西溜之間

格天井平 極彩色 瑞雲宝花模様 意匠 東大寺蔵織紋
 比廊下格天井 極彩色 古紋菱実模様 意匠 東大寺古織紋
 折上格天井蛇腹 極彩色 古紋山桜模様 意匠 東大寺蔵器物紋
 絵工 小池有終／彫刻 石川鐵次郎 後藤功祐／髹工 堰澤庄吉 越野半平
 成田浅次郎 三宅利右衛門／織物 杉田幸五郎

葡萄之間 (造営中は「西脱帽所」)

格天井平 極彩色 花襷模様 意匠 古紋革紋
 暖炉蛇腹 極彩色 波連千鳥模様 意匠 古織紋
 絵工 狩野守貴／彫刻 山崎喜三郎／髹工 柴田卯之助 西村庄蔵 堰澤庄吉

御車寄

東ノ間格天井平 極彩色 八重梅鉢模様 意匠 古彫刻紋
 西ノ間格天井平 極彩色 古紋葵花模様 意匠 東大寺蔵器物紋
 彫刻 高橋太助／髹工 西村庄蔵 市島浅次郎／織物 東京製織会社